

『ガーランド -獣人オメガバース- 下』

著：葵居ゆゆ

ill：羽純ハナ

翌日、宣言どおり迎えにきてくれたディエゴとジークフリードの屋敷に戻ると、彼は西の離れには行かず、本館の自分の部屋へとジルを連れていった。

なにか用があるのだろうかと思いながら部屋に足を踏み入れたジルは、窓辺にポーチュラカが置かれているのを見て目をみはった。

「これ、私の部屋の——」

「運ばせたんだ。ほかにも服や必要そうなものは持ってこさせたから、今日からはここで過ごしてくれ」

「ここでって、でもここ、ディエゴの部屋だよ」

「二人で過ごしても窮屈には感じないくらいの広さはある。大丈夫だろう。——たしかに西の離れの部屋よりは華やかさに欠けるが」

ディエゴは部屋を見回して、ひとり納得したように頷く。

「なんなら花を増やそう。長椅子はジルの好きなものを運ばせてもいい」

「いえ、そういうことじゃなくて」

「不満や不都合があれば遠慮なく言ってくれ。俺の部屋なら、ほかのオメガのことを気にしなくていいから、ジルも気楽だろう？」

ディエゴはどうやら、先日ジルがこの部屋に逃げ込んだのは、ほかのオメガとの諍いのせいだと信じ込んでいるらしい。事実は違うけれど、この部屋においてもらえるのは心強かった。

(ディエゴの私室なら、トネリア様が来ることもないよね)

「ありがとう。……嬉しい」

素直に、と内心で自分に言い聞かせながらお礼を言えば、ディエゴはほっとしたように尻尾を揺らした。

「俺の部屋だが、自分の部屋だと思ってくつろいでくれていい。——なにがあったかは話さなくてもかまわないから、そのかわり、遠慮だけはするな」

「——はい」

そっと労わるように触れてくる手つきが優しい。爪を短く整えた指先が、頬から目元を撫でていく。

「今日は顔色がいいな。——実家は、どうだった？ 少しは気晴らしになったか？」

「ええ」

くすぐったさに笑ってしまいながら、ジルはディエゴを見上げた。

「ステラが——ミユラー家の料理人なんですけど、彼女がスコーンとジャムを持たせてくれたん

です。よかったらそれでお茶にしませんか。……あ、でも、ディエゴはこれから仕事？」

「いや、今日は休みにした」

「最近ずっと忙しそうなのに」

「忙しかったから、今日くらいはいいだろう。スコーンが楽しみだ」

一昨日の不機嫌が嘘のように、ディエゴの機嫌はよさそうだった。ジルをエスコートして長椅子に座らせるあいだも尻尾が左右に揺れていて、ジルはそわそわと落ち着かない気持ちになった。

やっぱりディエゴはよくわからない。

(がっかりされたり、腹を立てられたりするよりずっといいけど……なんだか、前より感情が出やすくなってるみたい)

出会ってからまだ半年も経たない。その短いあいだにディエゴも変わっているのかもしれないと思うと、なんだか不思議な気がする。

初めて見たときに圧倒された、威風堂々とした体躯。艶のある豊かな毛皮の美しい黒。ひんやりしたアイスブルーの瞳。

ジルよりもずっと大人で、アルファで、力があって——なのに子供みたいな一面もあって、気づけばこうして、隣りあって座っているのだ。

ノルンは長椅子の前の低めのテーブルにお茶の用意を整えてくれた。あたためたスコーンにはジャムとクリームを添えて、サンドイッチの皿には気を利かせてくれたのか、ポーチュラカがいくつか飾ってあった。

さっそくスコーンを頬張ったディエゴは、満足そうに目を細めた。

「ああ、これはうまいな。全然甘くないから、ジャムとクリームがあう」

「一番シンプルな作り方なんだって。——昨日は胡桃の入ったニンジンのケーキを用意してくれて。私のことを心配していたらしくて、元気そうでよかったって、涙ぐんでくれたんですよ」

「いい料理人じゃないか」

「ええ。それに、ヨーヨーも元気でした。相変わらず脱走したがるから、追いかけていたりしていたら夜まであっという間で」

母がいらないのをいいことに、夕食も以前どおり使用人たちと食べたから、気楽で賑やかな時間が過ごせた。

「楽しかったです」

「……あと二、三日泊まりたかったなら、そう言ってもよかったんだぞ」

ディエゴは気遣わしげに眉根を寄せた。ジルは首を振ってみせる。

「でも、迎えは今日でいいって私が言ったことだから」

それに、昨日の夜は、あまり眠れなかった。ディエゴは明日迎えにくると言ったけれど、何時ごろだろう、と考えはじめたら気になって、寝つけなかったのだ。

「せめて、もっと遅い時間に迎えに行けばよかったな」

「いいえ。十分楽しませてもらったから、早く来てもらえてよかったです」

そう言ってお茶に口をつけると、ディエゴがまた尻尾を振った。見れば横顔は照れた様子で、

今にも笑みのかたちになりそうな口元を、頑張っけて引き締めている。

「ディエゴ、今日はずいぶんご機嫌なんですね」

もしかして、仕事でなにかすごいいいことがあったのだろうか。

ディエゴはどきりとしたようにジルを振り向き、ごまかすように腕組みした。

「いや、ご機嫌というほどでは——だが、うん。嬉しいことは嬉しいな」

「なにかいいことでもあったんですか？」

「昨日ちょっとな。思いがけないことを言われてからずっと、悪くない気分だ」

「ディエゴってそういうの、わりと態度に出るよね」

くすっと笑ってスコーンを味わって、やっぱりステラのスコーンとジャムはおいしいなとほっこりしてから——ジルはもう一度ディエゴの横顔を盗み見た。

くつろいでお茶を楽しんでいるディエゴは、一昨日のことなどすっかり忘れたか、まるでなにもなかったかのようだ。

こうなると逆に、ジルとしては切り出しにくかった。

(気持ちを正直に伝えるって言っても……なんのきっかけもないと難しいな。ディエゴも、蒸し返したくなくて、機嫌のいい顔だけ見せてるのかもしれない)

だったら、やっぱりこのまま、なにも言わないでおこうか。波風を立てずにやり過ごしても、なんとかなりそうだから。

そう思いかけ、でも一度はせめて謝ろう、と思い直した。

トネリアのことを黙っているのはディエゴのためのつもりだけけれど、怒らせたかったわけではないから、そのことだけでも。

とはいえ、謝るにしても、どこから話せばいいのか。

困って視線を彷徨わせて、ジルは部屋の壁際に目をとめた。

本棚があるのは知っていたが、よく見ると、棚にあるのは本だけではない。

ちょうど正面に飾られているのは、前に書齋で見せてもらったのとは違う帆船模型だ。その横には、古い地図が額に入れて飾ってある。

別の棚には天球儀もあった。いくつも木の輪を組み合わせた天球儀は飴色の艶を帯び、長く大切にされてきたのだろうと一目でわかる。並べられた本は背表紙から察するに、航海や星座に関するものばかりだ。

「ディエゴは、ほんとに星や海が好きなんだね。部屋にまで本があるなんて」

「ああ……、部屋にあればこっそり見られるからな」

兄たちには内緒だ、とディエゴは笑う。

「俺が星と船にいまだにこんなに興味があると知ったら、ゲラルトもいい顔をしないから、秘密にしておいてくれ」

「もちろん、言いません」

やはりこの部屋には、ゲラルトやトネリアは立ち入らないのだ。踏み込まれる心配がないとわかってほっとする一方、ということは、とジルは思う。

「ディエゴは、本当に諦めてないんだ。いつか船に乗るって」

「夢のひとつだからな。ジルだって、憧れることまでやめなくてもいいと思うって、このあいだ言っていたじゃないか」

ディエゴは立ち上がると本棚に向かい、丸めた地図を手にして戻ってくる。並んで座り直すと膝の上に広げ、ジルにも見せてくれた。

バーネルードだけでなく、海の向こうの大陸や島々まで描き込まれた地図だ。大陸と海とを比べると、どれだけ海が大きいのがよくわかる。

黄ばんだ羊皮紙は端がところどころ破れ、あとから書き加えられたらしい地名や注意書きがいくつもあった。

「こんな地図、初めて見ました」

「向こうの大陸の地図なんだ。バーネルードがここ。このあたりがセントラルだな。この港から海をずっと進んで、別の大陸の岬を通り過ぎた先の、この小さな島。ここまで行った者の手記を読んだんだが、面白かった。とびきり美味な果物があるらしいぞ」

「じゃあ、ここまで行きたい？」

「できれば。——だが最近、一族の関わっている仕事も興味深いと思っているところだ」

「ゲラルト様のやっている仕事？」

「兄の代理で、ある研究都市の人間と話し合っているんだ。学者というと子供のころに勉強を教えてくれた爺さんみたいなひとばかりだと思っていたが、話すといろんな者がいて興味深い」

そのうち研究都市にも行くことになりそうだ、と言いながら、ディエゴは目を輝かせた。

「彼らは新しい動力源を作り出す研究をしていて、実現すれば世界は大きく変わるだろう。最初は日々の暮らしが便利になるくらいだが、学者に言わせれば、ずっと未来には星にも行けるかもしれないと」

「星に!？」

そんなことができるのだろうか。

「本当に実現できるかどうか俺は知らないが、学者はそう主張してるんだ」

「もし……もしできたら、それって、すごいよね」

だって、空を飛ばないと行けないのだ。鳥みたいに、鳥よりずっと遠くまで飛べるなんて——そうできたら、どんなに楽しいだろう。

いいな、とついため息が出た。

「海どころか、空にも行けるなんて」

「——そういえば、まだ港には行ったことがなかったな。今度連れていこう。すぐ近くで大きな船が見られる」

「本当？」

嬉しい、と舞い上がってディエゴを振り仰ぎ、ジルははっとして動きをとめた。

ディエゴの話聞くのが楽しくてつい夢中になってしまったが、また出かける約束をして喜ぶだけでは、前となにも変わらない。

「ジル？ どうした」

笑みの消えたジルを心配して、ディエゴがじっと見つめてくる。大きな鼻先がすぐそばにあっ

て、ジルは手を伸ばして触れなくなつた。

鼻から額にかけての短い毛並みを撫でて、大きな耳ごと、頭部を抱きしめて頬を寄せたら、きっととても気持ちがいやすらぐだろう。ふかふかの首回りがどれだけあたたかいのか、短い毛に覆われたすべすべの部分からどんなふうに彼の体温が伝わってくるのか、ジルはもう知っていた。

覚えて、触れたいと思うほど——いつのまにか、ディエゴと触れ合うのが当たり前になっている。

当たり前になっているだけでなく、それを心地よいと、自分は感じているのだ。

その意味は——。

「ジル？」

ゆらりと胸の中が波打って、ジルは俯いた。

つきつけられた自分の心が悲しい。

(私——いつのまにか、ディエゴのそばにいたいって、思うようになってたんだな)

嫌いだななんて、とても言えない。むしろディエゴというひとに、魅力を覚えている。

惹かれればそれだけ、別れがつかなくなるだけなのに。

「……この前は、怒らせてごめんなさい」

「この前？」

ディエゴは怪訝そうだった。

「一昨日、部屋に逃げ込んで、なにがあったのかって聞かれて、私が暇つぶしの冗談だって言ったから、怒ったよね、ディエゴ」

「——あれは」

気まずげになったディエゴに、ジルは努力して微笑んでみせた。

「よけいな心配や面倒を、あなたにかけたくなかったんです。でも逆に、あなたにいやな思いをさせた」

「いや、あれは……怒ることはなかったな。悪かった」

「ううん、ディエゴが悪かったわけじゃない。ごまかそうとした私のやり方が間違ってたんだ。迷惑かけたくなかったんだけど——うまく言えなくて、逆に不愉快な気分になってしまった。失敗したって思ったら、すごく……悲しかった」

まっすぐこちらを見つめてくれているディエゴは、耳もジルのほうを向いている。真剣に聞いてくれているのがわかって、きゅっと胸が締めつけられた。

「変ですよ。ディエゴのことは大嫌いだったのにな。傍若無人で失礼なアルファだと思ってた。連れてこられた日なんて、腹が立って、悲しくて」

ほかにどうしようもなく、笑みを浮かべるしかなかった。ディエゴは思い出したように自分の頬に触れ、顔をしかめる。

「そういえばきみには、平手打ちにもされた」

「あのときは……全然、感情が抑えられなかったから、八つ当たりしてしまってたんだ。よく考えたら、そんなことだって初めてだ」

囁くような声と同じ音量で返して、じっと見つめあう。互いに視線が逸らせなくなってしまう

たかのように、ディエゴは動かなかつたし、ジルも動けなかつた。

「昨日、家に帰されるの、本当はいやでした」

「ああ、いやそうだったな」

「ディエゴが腹を立ててるのに、そのまま距離を置いてしまうのがいやだったんだ。——普通だったら逆ですよ。相手が怒っているときは、冷静になるまで離れてそっとしておこうと思ってもいいはずなのに。でも——ディエゴにはわかってほしいって、思ってる。私がなにを思っているか、考えているか、そのまま伝わったらいいのにな」

胸の中も、目の奥も熱い。

ジル、とディエゴは困惑した声で呼び、ジルは首をちいさく振った。

「もちろん、ちゃんとわかってます。ディエゴが理解したいのはオメガのことで、私のことも知りたいって言ってくれたけど、こんなわけがわからないと言われても困るよね。自分でもなにを言ってるんだらうって呆れてるくらいなもの。でも、今日だけ言わせて」

自分の声が震えているのが、みっともなく恥づかしい。ディエゴが居心地悪そうに身じろぎ、ジルは急いで続けた。

「ディエゴを困らせたくはないんだ。わがままは言わない。——でも、もしあと一回だけ、わがままを、言わせてもらえるなら……私をミュラー家に返すときは、前もって教えてもらえませんか。いつ返すか、——できたら、ひと月くらい前とかに」

「ジル、それは、」

「ディエゴの」

なにか言いかけたディエゴを遮って、ジルはぎゅっと両手を握りしめた。

「あなたの近くに、もう少しいたい。海が見たいとか、出かけたからじゃなくて。——なんでもかな。自分でもよくわからない。ディエゴがいつか船に乗るのが夢だっというのを聞いて、一緒に行こうって言ってくれたときは嬉しかった。できるわけないけど、ディエゴが嘘をつくとか、口先だけで言ってるわけじゃないのがわかってたから、どきどきして、嬉しかったんだ」

目を閉じれば今も、まぶたの裏に見える。夕方の海。潮風のにおい。いくつもの波に反射する、金色の光。

「なのに今は、思い出しても嬉しくない。十年後とか……ううん、きっと一年後だって、私はディエゴとは一緒にいないよね。——一緒にいられないと思うと、寂しくなる」

絞り出した自分の言葉でひどく苦しくなって、弾けるように感情が溢れ出した。

わかってしまった。

どうしてディエゴといるのが心地いいのか。

一緒にいたいと思うのは——彼となら、わけあえるからだ。

母たちに眉をひそめられてきた、心の底にひそんだ願いを、ディエゴはわかってくれるから。

自分はただずっと、認めてほしかったのだ。

歌に聞く異国。

絵に描かれた遠くの景色。

嗅いだことのない潮のにおい、海の向こうにあるという国、高い山を越えたその向こう側——

それらをこの身体で知りたいと願う心に、寄り添ってほしかった。

「いられたらいいのに」

いくらごまかしても、自分の気持ちは偽れない。

ステラの言っていた「本当の気持ち」は、閉じ込めても見ないふりをして、ジルの中であって消えたりはしない。

「ここに、いられたらいいのに。船には乗れなくていい。空を飛べなくてもいいです。それがほしくて帰りたくないわけじゃない。ただもう少しだけ、ディエゴと……」

ジルは震える声を呑み込んだ。

ディエゴはずっと沈黙している。急におかしな要求をされて困っているのだろう。

「すみません、変なこと言って。えっと、もともとは、感謝してるって言いたくて……だからその、恩返しをするためにも、ミュラー家に返すときは教えてくださいって、言いたかったんです」

「感謝なら、あの村の宿でも聞いた」

ふ、とディエゴの声がやわらかくなった。彼の大きな手が頬に触れてきて、ジルはびくりと身体を揺らした。

俯いた顔を持ち上げたディエゴは、目をあわせて微笑む。

「さっきから聞いていると、自惚れそうだ。まるで、ずっと俺といたって言ってくれてるみたいで」

「——私は、変わってしまったのかも」

顔の位置が近い。透き通るように美しいディエゴの、湖のような瞳にジルが映っている。泣き出しそうな、みっともない表情だった。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>